

第6回海外ネットワークに関する万国津梁会議 議事概要

日 時：令和4年1月5日(水) 13:00～15:00

場 所：沖縄県庁6階第2特別会議室

出席者：小川寿美子委員長、新垣旬子委員、新垣秀彦委員

安里三奈美委員*、佐野景子委員* (*オンライン参加)

議 事

(小川委員長)

今回から二回にわたって知事から追加議題が提示されている「Withコロナ時代における世界のウチナンチュ大会」のテーマについて議論をすることとしたい。

まず事務局から、会議資料および内容を説明願いたい。

(宮城清美 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課ウチナンチュ大会準備室室長)

資料3から資料5に沿って説明

(阿波連貴夫 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課ウチナンチュ大会準備室主幹)

資料6に沿って説明

(小川委員長)

説明ありがとうございました。

(新垣秀彦委員)

資料6にある大会日付について曜日も示されたい。

(宮城清美 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課ウチナンチュ大会準備室室長)

日曜日から木曜日となる。

(小川委員長)

令和4年10月30日が日曜日になる。

議事に移る。まず、委員からの意見をそれぞれ10分程度頂きたい。

最初に小川から発表する。追加配布している資料にもとづき説明する。第7回世界のウチナンチュ大会に対する私案、私見については、その一番上に記載している4項目である。この4項目について簡単に説明する。

1番目は「オリンピック方式」について。第7回世界のウチナンチュ大会は、オンラインを取り入れるということもあり、コロナ禍においてどのような新しい試みができるかということ考えた場合、「オリンピック方式」、即ち世界に発信することを意識し、日本時間の昼間だけ行うのではなく、24時間開催するという提案である。

例えば、テレビ会社に協力いただき、日本の真夜中の時間帯に日本でのイベントの様子を録画配信し、更に地球の反対側のブラジルやアルゼンチンでのイベントの様子をテレビを通じて日本・沖縄にてライブで観賞できるようにする。YouTubeという方法もあるが、テレビの方が県民の方に観てもらえる機会がより広がる。これにより懸念事項であった県民の「世界のウチナンチュ大会」への関心・参加・意識が一層高まると思う。

2番目は「Ready MadeからOrder Madeへ」と記載したが、3番目にも記載したとおり、今までの世界のウチ

ナンチュ大会は、「打ち上げ花火」であった。つまり、「ボン」と花火をあげて、楽しんだら、はい終わり。せっかくこれだけの人員や資源といった色々な投資をしながら、数日間の花火観賞で終わらせてしまうのは勿体無い。そこで、2番目の説明に戻るが、大会の数か月前から、それぞれ日本側、沖縄側から、こんな交流をしたい、こういう人と会ってみたい、すなわち、様々な情報交換のマッチング伝言板のようなものをどこかに設ける。そして、大会期間中に沖縄に滞在する人が、沖縄滞在期間を有意義に過ごしてもらえるよう、ニーズのマッチングをするようなネット上の伝言板を作るのはどうか、ということである。

3番目は、「打ち上げ花火」からの脱皮と大会経験の蓄積である。つまり、大会のその年で終わりにするのではなく、過去にどういったことが世界のウチナンチュ大会で行われてきたかについて、過去第1回目から第6回目に作成した報告書などの資料をしっかりとアーカイブ化し、過去の蓄積が見える化すること、そして今回の第7回大会において集まる様々な資料や動画等をしっかりとアーカイブ化し、いつでも見られるような、そういうシステム作りに努めるということ。

最後の4番目であるが、これは「海外ネットワークに関する万国津梁会議」で議論した4つの課題の提言を少し意識しながら、第7回世界のウチナンチュ大会のイベントを仕込むことも良いのではという案。参考までに、抜粋ではあるが学生のアイデアを46案、表にまとめた。万国津梁会議の4つの課題と学生のアイデアが関連すると思われる場合は、表の一番右側の欄に番号を付した

次に、学生のアイデアについて説明する。

名桜大学では「国際学入門」という科目があり今回2回ほどウチナンチュに関する講義があった。1回目は、伊佐正さん、玉城直美さんが、特にヤンバルの移民に関するお話を、2回目は、に今回の会議にオブザーバー参加している比嘉千穂さんが、世界の若者ウチナンチュ大会に関するお話をしてくださった。

2回の講義を受けて、受講生計203名のうち176名が自分たちなりの世界のウチナンチュ大会で開催するといいいのではと思うイベント案を提出した。これらを計量テキスト分析ソフトで分類すると主に八つの提案に分けることができた。

左から、1番目は「移民や歴史」に関して、人も学ぶ機会を持ちたいということ。

2番目は、「音楽・言葉、語る」をキーワードに、イベントを立ち上げたらどうかということ。

3番目は、「踊る」。

4番目は、「料理・地域」がキーワード。

5番目は、「理解・深める、披露・紹介」というキーワード。

6番目は、「楽しむ・感じる、動画・クイズ・ゲーム」ということ。

7番目は、「オンライン、スポーツ」というキーワード。

8番目は、「沖縄・世界、交流・知る」で、これが最も多かった。

共起ネットワークで示されたこれらのクラスターは、関連のあるキーワード毎に結ばれており、円が大きいほど、語られた回数が多いことを示している。しかしながら、こうしたキーワードの羅列だけではわからないと思ったので、非常に面白いと思われる案を挙げたものが、2ページ目の1番から46番。委員においても面白いと思われるものは、議論の途中でも議論できたらと思う。1番から46番について概要をまとめ分かりやすくした。

例えば通販、通信販売、遠隔、クイズ、オンライン交流、動画コンテスト、プレゼント交換、さらに、連続動画を撮影、沖縄の伝統工芸、かたやびら、ウォークラリー、ものづくり等がある。就労支援というアイデアも面白いと思った。それから、「喜友名諒」選手を招待・招聘する案やみんなでモニュメントを作ってみよう等、若者ならではの案が出た。

今回はWithコロナでの大会開催なので、以上のアイデアが、対面のみでの開催が可能なのか、遠隔でも可能なのか、遠隔のみで可能なのかということ、私なりに分類し資料に記載した。今後の議論のたたき台になればと思って作成したので、後程御覧頂きたい。

私の発表は以上。

続いて、新垣旬子委員、どうぞよろしくお願ひいたします。

(新垣旬子委員)

委員長の話を受け、このようにウチナーンチュ大会を行うなら全てを網羅していると感じた。実は私自身はウチナーンチュ大会に参加したことがないので、ウチナーンチュ大会がこれまでどのように実施されてきたのかは、新聞等でしか見ていないが、このように委員長が発言されたことを準備したならば、沖縄全体で行ってきたことを世界に発表するというようなイメージに見える。そうなれば、ウチナーンチュ大会の30年間の記録を、皆でいつでも見られるようにすることは今の時代だからできることであり、今まで蓄積したものを有効に使うというのは素晴らしい考え。その中でも、どのようにイベントを作るか、県民がどういうふうに参加するかを考えることが、まず真っ先にある。

また、今回、国際線の再開状況を考える中での大会の開催となると、ハイブリッドの中でもネットが中心になってくる。そうであれば、その環境作りをどうしていくのかということ。まずは、Wi-Fiだが、沖縄は繋がらない。多くの観光客からクレームが出るほど、沖縄はWi-Fiのインフラが足りてない。ハイブリッドの方向で進んでいく中で、Wi-Fiの環境をどう作っていくのか、その強化もとても大きいと思う。つまり、たくさんのプログラム作って、多くのことを実施しても、発信できるのかどうかということ。

しかしながら、委員長が説明したテレビ局を通じた県民へのアナウンスというのはすごく大きなことだ。

今回の大会においては、次の大会や、さらに10、20年後のためのベース作りができるのではと考える。Wi-Fiの強化は、とても大きい問題になってくるかと思う。

このイベントのターゲットは全世界のウチナーンチュであり、ネットを活用しないと全世界に広がらない。海外の県人会、WUBとの交流の中でネットワークはできているが、一般県民とはいかにネットワークを作るか、そうした手法をどう組み込むのかというのは大会を成功させるために重要と思っている。

また、県民への周知と参加を促すため、先ほど新垣秀彦委員が「これは何曜日？」って聞いているのは、学校や県民が仕事にいつている時間を踏まえ、どのような時間帯が良いのかということ。沖縄が中心なのか、国外、県外が中心なのか、バランスをどう取るかということも、大きな考えの中で構築しないといけないのではないか。私としては、色々なことを実施するに向けて理想が多くあり、多大な準備をしていると思うが、どのように総括するかも、非常に重要と思っている。

(小川委員長)

ありがとうございます。

ご発言は主に、Wi-Fi環境の更なる充実の重要性について述べられたと思う。

旬子委員にお尋ねしたいのだが、学生の意見として、説明資料2ページ目に企業フェスティバルや県産品の魅力をもっと理解してもらおうという案が大学生から出ている。例えば「企業フェスタ」、「就職の問い合わせが多い ⇒ 世界のウチナーンチュにとって就活しやすい環境作り」や、「沖縄に住むウチナーンチュが世界で働く環境作り」等、また、「国際観光地としての沖縄」や、県産品の魅力を理解してもらおう産業まつり、伝統工芸品の紹介・ワークショップ等、resortech okinawa (リゾートテックオキナワ) との記載もある。こうしたイベント案について、新垣旬子委員のご専門からご意見を伺いたい。

(新垣旬子委員)

こうしたことについては、沖縄は準備ができていると思う。

1千万の観光客に対応する準備は何十年も行ってきたので、沖縄の至るところにそのツールは出来ている。それらをどう構築するかということ。産業まつりや離島フェア等、そういう組織が多く出来ているので、そう

したことを実施するのは問題ないと思う。

(小川委員長)

それをオンラインでもできるようになるかどうか。

(新垣旬子委員)

今、実際にオンラインの利用が進んでおり、県内の様々な会議や大交易会についてもオンラインになっているので出来ていると思うし、そうした経験を積んだ企業もあると思うので、問題ないと思う。

大会のハイブリッド開催は良いと思うが、先ほどからWi-Fiの強化を述べているのは、沖縄ではWi-Fiが足りず、すごく遅い。観光客が入ってくるともっと厳しい。

物産の強化については、今後の沖縄は、このウチナーンチュのネットワークを使って、遠いアルゼンチンやブラジル、そして香港などに向けても国際化していくのであり、また、TPPには農連などが多く参加しているから、そこに参加している中に、いかに私たち沖縄やウチナーンチュが、県内において国際力を発揮できるかということだ。ウチナーネットワークには、多くの海外の方々がいるから、そういうチャンスは生かしやすいと思うし、それを大に行って頂きたいと思う。

次に、システムをどう組み立てるかということ。使い切れないくらいあるたくさんのパーツを組み立て、テストする。5年毎のウチナーンチュ大会で組み立てていくシステムは、毎日使えるように自立させていく。システムを大量に作るよりも、5年後には、システムをより素晴らしいものにしていくことで、より着実に発展できると思う。

沖縄の県産品は物産だけではない。沖縄の企業の生産物を海外に伝え、なおかつ、世界にいるウチナーンチュの産業を沖縄がいかに全国に伝え、全国から沖縄経由で、ウチナーンチュのネットワークを使って、世界中に展開できるかということにおいても、大会を通した県経済への貢献ではないかと思う。

(小川委員長)

そのため情報プラットフォームとしてのワールド・ウチナーンチュ・ネットワークが存在する意義が高く、更に今年度4月より開設されたウチナー・ネットワーク・コンシェルジュに対して期待が高まることと思う。それでは、新垣秀彦委員にお願いしたい。

(新垣秀彦委員)

委員長の説明も新垣旬子委員の説明も非常に参考になった。特に、委員長は、学生に対して、授業の中でいろんなアンケートや、ワークショップを行ったものと思うが、ここが重要なキーポイントではないかと思う。これまでのこの考え、つまり、海外ネットワークに関する万国津梁会議の中で、若者の参加が少ない、もしくは県民の参加が少ないといったことが課題として挙げられている。その中で、今回のWithコロナの中の世界のウチナーンチュ大会というテーマについては、海外から参加する方々はもちろんだが、県民の参加、もしくは機運の醸成といったものをどのようにしていくのかが一番重要なポイントではないか。

会議で作成した提言では四つの課題に関する提言が記されている。その中では、特に移民学習の機会の奨励が挙がっていた。その中で、教育委員会との連携、もしくは市町村も含めて、そこをどのように、事務局、もしくは県が、もしくはこの実行委員会が、141の実行委員会の皆さんをどう捉えて、巻き込もうとしているのかということ。つまり、今、名桜大の学生が巻き込まれて、自分たちが主体になって、ウチナーンチュ大会をやるとしたら、どんなことをしたいかと議論している。我々や行政、各企業がこうしたことに参画して、特に学生を参加させるために取り組めば、学生自身が作りこんで、自分たちが自主運営するということだ。

先ほどの日程の中で、12月2日が、市町村が主としてイベントを実施するという予定案がある。先ほど、新垣

旬子委員から発言があったが、これは火曜日にあたる。そういう中で、どんなイメージを持っているのが、ちょっとわかりづらい。この5日間の中に押し込んでしまっていないか。そうであれば、私としては世界のウチナーンチュ大会の5日間はグランド大会ということとして、6月からは各市町村がこの10月のグランド大会に向けて、意見調整しながら作りこんでこの大会に関わっていく、そういう横の連携があってもいいのかと思う。そういう意味では沖縄の「ワンからワンから（私から私から）」ではないが、このウチナーンチュ大会を、盛り上げるような仕組みが必要なんじゃないかなと思う。

先程、イベント会社にこのイベントを委託しているとの事務局説明があったと思う。それは、この5日間に限ったものであると思うが、そこは、あらゆる主体が、どう考えるかについて実行委員会委員の皆さんにも、是非考えていただきたい。

もう一つ、この海外ネットワークに関する万国津梁会議の提言書を見て欲しい。我々が万国津梁会議で提言したことを共有していただくことも一つの対応かと思う。そういう意味では、交流に限るものではなく、そこから教育もしくは企業とのマッチングをどう考えていくのかも重要だと思う。実行委員会の委員は民間の多くの方々をお願いしているが、沖縄県の行政の職員が、自分の部局の担当する業務・政策について、このウチナーンチュ大会に関わるものを、一つ一つ、つぶさに検討し、その中でできるものはないのかと議論されてこそ、この大会が浮き立つと思う。やっぱり縦で割ってしまうと、Withコロナのウチナーンチュ大会は、これまでのウチナーンチュ大会と変わらない状況になる。そうであれば、先ほど説明したが、子供達にどう継承していくのかという点で、これからのウチナーンチュ大会では本当に毎年毎年これをリピートできるような仕組みが必要じゃないかなと思う。

これに関しては市町村、学校現場がの役割が重要であるし、当然、高等教育の中においても、それは勉強しないといけないことと思う。5年に1回というと、例えば小学生なら1年生の時に当たる人もいれば、6年生もいる。移民学習に関して、教育の各段階で何らかの深まりが掴めないのかなという気もする。特にウチナーンチュ大会は、全国的にもこういう取り組みは無い。非常に素晴らしいことと評価を受けているから、そこから大会の実施だけではなくて、次世代の子供たちの育成のために、そういう視点で取り組んでいく必要があるのかなと思う。

(小川委員長)

新垣秀彦委員、ありがとうございました。

秀彦委員のご意見の中で、例えば、今回大学生からこういう企画はどうかというイベント案が出ているのであれば、そういうところを自主運営してもらおうということも考えたらどうかという話、そして、実行委員会の各委員に横の連携をしてもらおう等して、大会の方に巻き込んでいく、自主的にいろいろな企画に取り組んでいくような仕組みづくりができないものかという提案、更に子どもへの継承については、移民の歴史をいかに継承していくかということも、もっともっと具体的に入れ込む必要があるのではという内容であった。

今回の会議資料の一つとして、事務局に第7回大会の暫定的な日程表を作っていただいた理由というのは、もう既にでき上がっているシナリオの中にどんな隙間があるのか、もしくは隙間がないように思いながらも実は地球の裏側では、日本の夜中の時間であれば十分にイベントが組める時間があることを理解しやすいような形にしたためでもある。事務局に作成してもらった表を見て、まだまだ、いろいろな案が組み込めるのかなというのが見て取れる。同時並行的に海外を中心に拠点で行われている第7回世界のウチナーンチュ大会関連のイベントがあれば、そういったものも私たちが視聴できるような、もしくは参加できるような、もしくはライブで交流できるような、そういった企画を入れてこそ、Withコロナ時代の新しい第7回の世界のウチナーンチュ大会の開催であるのかなと思う。どうもありがとうございました。

では引き続き、安里委員をお願いします。

(安里委員)

沖縄は、大分コロナの感染者が増えている状況も心配だ。私の方は、Withコロナ時代におけるウチナーンチュ大会に関して、これまでのウチナーンチュ大会を振り返ると、課題のひとつに県民周知がある。今までは、このウチナーンチュ大会のバランスというのが、世界のウチナーンチュが中心だった大会だったが、今回、このコロナ時代において、視点を県民に当てることが考えられると思う。オンライン開催は、比率でいうと対面2、オンライン8ぐらいだと思っているが、このオンライン開催のメリットとして、県民参加、県民周知を図る大会を目指すといいのではないかと考える。

オンラインになったことで今までできなかったプログラム内容を開催していくことが可能になってくるので、例えば、学生のアイデアにもあったが、世界各国に飛んで行って、オンライン上で交流ができるだとか、オンラインスポーツ大会であるとか、オンライン上で学校、そして学生の交流もあると思う。そして昨年、福建省がエイサー交流等をオンラインで交流していたと思うが、エイサー交流なども可能になってくると思う。

先程の産業まつりに関連して、まつりが一週間、ウチナーンチュ大会は一週間予定しているが、他のイベントと連携して、例えば、産業まつりを世界のウチナーンチュ大会の連携イベントとし、海外のウチナーンチュも、産業まつりをオンライン上で見られるようにすると、一週間だけではなくて、年間を通して大会に向けた盛り上がりにもなるかなと思っている。

今、思いつくアイデアは以上。

(小川委員長)

佐野委員、お願いできますでしょうか。

(佐野委員)

大きく三つ、お話ししたい。

まず、資料6にあるのは、ある意味、中心となるような、実際に大きな会場を使って行うグランド大会のようなものの日程であり、一方で、資料4のイベントプログラム目標にあるとおり、他にもいろいろ行うことがある。過去のウチナーンチュ大会の報告書では、最終的にそれらを総合し、全てをまとめて「(ウチナーンチュ)大会」としていたと思う。なので、資料6は、あくまでもそのグランド大会について、その会場を使って行うイベントのことだけを示しているものとして、その他のところをどうするかということも併せて考えないといけないと思う。私もウチナーンチュ大会に実際に参加したことがなく、NHKなどテレビで見ただけなので、臨場感含め全体像がきちんと分かっていないかもしれないが、イベントだけではなく、落ち着いて学ぶ、考える場というのもあってもよいのではないか。これは、万国津梁会議の提言にあるようなことを実現するためにも、また、これも資料4にあったが、偶然にして復帰50年とも重なることになり、やはり沖縄の歴史を振り返る、みんなに分かってもらう、心を寄せてもらう良い機会でもあると思うので、委員長が先程、打ち上げ花火という言い方をされていたが、この大会で楽しく盛り上がるだけではなく、この機会に関心を持って学んだり考えたりする機会も提供できるようにしてほしい。

おそらく、そういうものは、県や市町村の図書館や資料館、博物館などで継続的に、このウチナーンチュ大会が行われる年に合わせて、企画展示が行われているのだと思うが、それらもきちんと連動するように、それらも含めてのウチナーンチュ大会である、ということがよく分かるようになってほしい。

そこでもオンラインは活用できるだろう。オンデマンド教材によってクイズ等を行い、賞品が出るようにして、グランド大会で表彰を行うとか、うまく連携して、この五日間だけでなく、継続的にウチナーンチュ大会が行われている、そこに繋がっているということがわかる仕掛けになるといい、というのが一点目。

二点目は、来県できない方々、特に、海外の移民、移住者やその子弟の方たちについて、双方向というか、皆さんが大会の一部になってもらうことを考えれば、資料6のイベントスケジュールの時間、時差からは、ラ

イブ配信したとしても、皆さんにとってなかなか見ることができる時間帯ではないように思う。見るだけでなく、ブラジルやボリビアからも発信するということがあって、それも大会の一部とすることを考えてもいいのではないかな。

先程、安里委員が、沖縄県内にいる県民への周知や参加促進を図る必要についてお話しされていたが、その一方で、これまでのウチナーンチュ大会、あるいは、ウチナーネットワークを支えてきたのは、やはり海外に行かれた移民・移住者、その子弟の皆さんであったことを考えると、その人たちが発信する、大会の一部になっているということが感じられるような仕掛けもあるといい。多分それは資料6に入らない部分なのだろうが、そこもしっかり考えていく必要があると思う。

今まで申し上げたことも重なるが、三点目は、特に今、私も県外にいてなかなか(コロナ禍で)沖縄に行きたい中で、もちろん沖縄の皆さんが楽しいものを見せてくださるといのもとても良いのだが、やはり大会を見る県外の人たち、特に沖縄に直接の関係がないような人たちにとっても、沖縄に心を寄せる良い機会になると思うし、心を寄せる機会になってほしい。節目の(復帰)50年という年に、沖縄がここまで辿って来たものを振り返り、さらに今、沖縄が向き合っているいろいろな課題に対しても、本土の人間と一緒に考えてもらえるような、そういう気持ちにもなるような大会になってほしい。それが、特に今、私が県外にいて強く思っていることなので、やはり、大会を見て、オンラインでも参加して、沖縄と一緒に、このウチナーネットワークを知るとすごく良いことがあるのだとか、そういうふうに思えるような発信をしていかないとけないと思う。

ステージイベント、文化体験、料理物販など、それぞれ沖縄をしっかり伝えていくという意義やコンセプトはあるが、皆さんが一つに向かっていける目標というか、打ち出しが今一つ見えないのではないかな。うまく言えないのだが、みんなが、そこに心を一つに目指すものがあるって、それぞれにやることをやって、それを県外の人が見た時に「沖縄ってやっぱり凄いなね。一緒になってやっていきたいな」と思うようなものになる。そういう点では、この資料からは、目標が散逸化しているような感じがあり、一つ繋ぐものがあるとよいと思う。おそらく過去の大会の方が、そこが非常にはっきりしていたような気がするので、原点に戻るではないが、どうしてこの大会を今やるのかというのを、みんなが共有できるように、何かピシッと言い表せるとよい。具体的な案が無くて申し訳ないが、資料を見てそのように思った。

(小川委員長)

佐野委員。貴重なご意見をどうもありがとうございました。

大きく三つの案を非常に分かりやすく説明して頂けたと思う。

一つ目は、落ち着いて考えて学ぶ場というものを考える。

二つ目は来県できない参加者にもちゃんと大会の一部になって頂くような工夫。三つ目は、海外や県外の人が心をつなぐ機会になるための何か一つに向かっていける目標みたいなものが、今回のプログラムでは見えづらい、散逸しているというようなお話だったと思う。

来県できない参加者、特に海外の参加者も大会の一部になって頂くというようなことについては、これは日本のテレビ番組の方、もしくは、テレビ会社の方の許可もしくは賛同が頂けたら、例えば、沖縄の真夜中は、南米や北米の昼間にも当たるわけです。ですから、あちらの昼間に実際にライブで行われている世界のウチナーンチュ大会関連のイベントなどを沖縄の真夜中に配信してもらおう。恐らく真夜中でもテレビを見る方はいらっしやると思う。そのように、うまく24時間を使い分ける。オリンピックのライブを見たい場合は、私達も真夜中に起きていないじゃないですか。そのようなイメージで5日間を有効活用できないものかと言うようなことも考えられる案として、暫定的な大会日程表を県事務局に作成していただいたという経緯もあります。

(小川委員長)

次に、オブザーバーではありますが、ウチナーネットワークコンシェルジュの4名の皆様のご意見、よろしくお願ひします。

(ウチナーネットワークコンシェルジュ 比嘉千穂)

初めまして、ウチナーネットワークコンシェルジュの代表をしている比嘉千穂です。よろしくお願ひいたします。

委員の皆様からのご意見、提案に賛同する。とても素晴らしい意見だなと思って聞いていた。私たちの方では、今年4月からウチナーネットワークコンシェルジュとして取り組んできた中での、ウチナーンチュ大会へのご提案というか、用意していただけたらというポイントをお話したい。

私からは5点ある。一点目が、県外や海外で、県人会に所属されていない個人の方がウチナーンチュ大会に参加する仕組み、その周知について、今回、力を入れていただけないかなと思った部分。

これまでコロナの中、オンラインでイベントや意見交換を海外の方たちと行ってきたが、その中でウチナーンチュ大会は、県人会に属していないと参加できないとか、また開会式・閉会式に参加するには、どうしたらいいのかというようなご質問を受けることが多々あった。

ですから、今は県人会に所属されていない方たちも、今後、ウチナーネットワークの素晴らしさ、さらに、沖縄の文化を学びたいとなった時に、このウチナーンチュ大会をきっかけに、やっぱり県人会に入ってみようとなる流れにもなるかなと思うので、そういった個人の方達への配慮が一点目です。

二点目は県内の一般の方が参加しやすい仕組みについて。やはり皆さんも発言されたとおり、どうしてもこの世界のウチナーンチュ大会というと移民された方たち、自分自身の親戚がいる方というふうに考えられる方がいるので、自分事にしにくいのかなということが懸念として挙げられると思う。

ですから、やはり一般人が参加しやすい仕組みとしては、例えばだが、大会の実行委員会の団体の皆様、企業様がいるので、その方達に呼びかけて、大会の期間中に、例えば、半日なりのプログラムに参加してもらえるような仕組みを作るという形で、まず実行委員会の方たちの力を借りて参加できるような方法、仕組みがあればと思った。

三点目が、特に今回、プログラムに関して言語への配慮が大切かと思っており、やはり、ウチナーネットワークコンシェルジュができたことで、英語を話す方々は多いが、スペイン語やポルトガル語は、世界のウチナーンチュの主要人口であるにもかかわらず、やはり言葉の壁があり交流ができなかったという人たちがいる。コンシェルジュができたことで、その人たちにとっても喜んでもらった部分があるので、日本語、英語が中心になるのだとは思いますが、特にポルトガル語、スペイン語圏の人たちに対しての周知や、プログラムや意義の説明等を充実して欲しいと思った。

四点目は、ハイブリットに関する事。もちろんコロナの状況なので、とても重要だと思うが、その分、やはり時間や労力に関し、実際に対面で合う方とオンラインで会う方と双方配慮しないといけない。オンラインで簡単でしょって思う方々もいるかと思うが、その両方、二つ開催することに対して、本当にスタッフや関係する人たちが、一緒になって作り上げていくこと、その難しさとかって言うのを考えて欲しい。

五点目は、私たちに関する事だが、やはりウチナーンチュ大会が終わった後、打ち上げ花火になっていたところだが、今後私たちが担っていくべき役目があり、私たちの立場かと思うので、大会事務局と連携しながら、参加した方たちがウチナーネットワークコンシェルジュと一緒に何か取り組みたいとか、何かこう次のステップに繋がるような仕組み作りを私たちも一緒にできたらなと思う。私の方では以上です。

(小川委員長)

比嘉さんどうもありがとうございました。

金城さつきさん、お願いします。

(ウチナーネットワークコンシェルジュ 金城さつき)

感想と言うか、提言ではないが、皆様のお話を伺っていて、4月からウチナーネットワークコンシェルジュがスタートして、我々もこう初年度っていうこともあり、色々お任せし、相談しながら、いろいろ取り組みを行ってきたが、今、比嘉千穂さんの方からお話あったように、県外、海外の方々からも色んな要望や相談等を受けてきた。

その中で色々取り組むべきところが出てきたのは確かだが、その一つとして、人的ネットワークをどう作るのかということについては、我々としても、いかに繋いでいたら良いのかということを考えているところ。

ですので、5点目、大会終了後も継続していく中で、大会後だけではなくて大会前から、引き続きこちらでこのように取り組んできた中で見えてきたことです。

また、ウチナーンチュ大会事務局や、実行委員会で話されていることなども、共有というか、打合せをしながら、大会後の形づくりみたいなところを、私たちもまた一緒に議論、話をさせていただいたらよいのではないかと考えている。ただ、これまで長く議論を続け、意見が交わされてきたとも思う。企業や団体だけではなく、今は個人でも、多くの取り組みされている方々もいるので、どこまでカバーするのも含め、何となく、まだイメージが掴めないところではあるが、そういうところも気になった点。

最後に、教育の機会について、私も、このウチナーネットワークコンシェルジュに関わる前から、この教育事業の取り組みに関わったことがある。2006年の大会だったと思うが、学校での取り組みが開始され、何度か教育委員会の協力をお願いし、大会が終わった後も継続して、交流推進課の事業でも行われているが、大会後も継続した取り組みがなされるように授業の一環でも行われている面はあるものと思う。

そうしたことが、どのようにはっきりと効果が出るのかについても検証が必要かと思う。自分が大学生になって、小学生、中学生の時に自分は確かこうしたことを言っていたなという思いを持っている方々もいると思う。波及効果と教育庁等との連携の在り方を考えていく必要があると思う。もう十年経つのでその辺も、振り返ってみたいと思う。以上です。

(ウチナーネットワークコンシェルジュ 喜久里 瑛)

私も実はウチナーンチュ大会の記憶が凄くある。当時、学校で一校一国運動があり、ハワイの人と繋がったという記憶が思い出に残っていた。そのため、教育現場は凄い影響力があると感じている。

資料6にあったゴールデンタイムと思われる日本時間の9時ぐらいからの時間帯に、学校現場と繋がる教育向けのイベント等を盛り込み、有効利用して欲しいと感じた。

また現在、市町村において移民関係の資料展等はどうように開催されているか、ヒアリングを行っている。その中で、既に移民史を発刊しているところでさえ、モノが残っておらず、まとめた人が既にないため、どうやって資料を再度掘り起こすのかという課題や、人手がつけられず、ウチナーンチュ大会やウチナーンチュの日等に合わせて、何かイベントを行うのが難しい状況という話を聞く。

今、沖縄の移民関連のパネルの貸し出し等がなされているが、市町村イベントを任せる際に、そういった有効活用できるものを増やしてもらい、人手が足りない市町村がウチナーンチュ大会の時、資料展示等をしやすい環境をつくってもらえると、助かるのではないかと感じた。

(小川委員長)

ありがとうございました。

私はヤンバルの各市町村が開催する歓迎会に、前回の大会の時は全てに関心のある教員や学生に参加してもらい派遣、そこで色々な情報交換をしました。確かに盛大な歓迎会であった。一方、徐々に移民をした家族や

親戚と数年、数十年連絡が途絶え、所縁の貴重な品々、例えば渡航時のパスポートとか、そういったものの価値を知らずして、廃棄処分にしてしまうという様な事が起こっているようだ。

ヤンバルに限らないのだが、かつて移民として世界に移動した祖先が居るといふ方々が「寄贈しますよ」といふ様な品があれば、受け入れるような、なんかそういったキャパシティも、このコンシユルジュで持っていたら嬉しく思ふし、またこの世界ウチナーンチュ大会の時に、そんなに大きなものは持ってこれないが、大切なうちのおじいちゃん、おばあちゃんのものですつていふようなことを集めたりする。もしくは、その写メを取って、コレクションするということもアーカイブ化を推進する上で大切な試みではないかと思つたりする。ありがとうございました。

アンドレスさん、お願いします。

(ウチナーネットワークコンシユルジュ 比嘉アンドレス)

私自身は、名桜大学の学生の時を含め一番覚えているのは、小川先生のプレゼンテーションの中で、アイルランドの移民研究やアイルランド移民と沖縄移民との違いを授業されたこと。小川先生の活動を見て、今回も、そして2年前の第2回万国津梁会議に参加した際も、どんどん前に広がっていって、どんどん大きくなっていることを感じ、移民の子として、本当に心から嬉しく思ふ。

もう一つ、大会をみんなで考えようとした時の、名桜大学の学生も含めた取組が一番良かった。やはり、教育現場からスタートすることで跡が残る。残っていけば、種を蒔いていくという形になるから、非常に良いことと思ふ。名桜大学はヤンバルにある大学なので、ヤンバルンチュの移民者が多い。沖縄移民といえばヤンバルンチュ移民といつてもいいぐらい数が多いので、とても大切なところに居て大切なことを行つて頂いていることに感謝している。

(小川委員長)

次に自由討議の時間にしたい。

冒頭に、先程、佐野委員の方からいくつか挙げて頂いたポイントの最後、つまり、県外の方が心を寄せる機会になって欲しいが、今回の世界ウチナーンチュ大会の中で、心をついに繋いで向かっていける目標というのが、少し、もやっとしていふのではないかといふような意見があつた。

今回の第7回の世界ウチナーンチュ大会のテーマ、「ウチナーのシンカ、今こそ結ぶ世界の輪」といふのがあつた。一応これがテーマにはなつていふが、これを選んだ経緯なり、もしくはこのテーマに寄せる期待なりといふ心の思いを実行委員会の職員の方からご説明して頂きたい。

(宮城清美 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課ウチナーンチュ大会準備室室長)

第7回世界のウチナーンチュ大会のキャッチフレーズ「ウチナーのシンカ、今こそ結ぶ世界の輪」のシンカとは沖縄の言葉で「仲間」といふ意味であり、世界のウチナーネットワークを担うシンカこそが真の価値(真価)であること。また、コロナ禍において人との繋がりが求められている今こそ、ウチナーンチュ大会を通じて世界のシンカ同士の輪を結び、更なる発展を遂げることができるとのメッセージが込められている。

今大会はハイブリット開催ということで、ウチナーンチュ大会事務局としてもチャンスと考えている。オンラインによって、今まで参加ができなかつた方達、今回コロナの影響で参加したくても、「今回は行けない」といふ方達も含めて、そして、多くの県民へ参加を呼びかける。ウチナーンチュ大会を知つて頂いて、ウチナーネットワークの素晴らしさといふものを知つていただき、ネットワークを発展させていきたいと考えている。目標としては、ウチナーンチュ大会を知つて頂き、更にネットワークを広げていくこと。

(小川委員長)

何か一つのテーマというよりも、目標としてはウチナーネットワークの素晴らしさを、今まで関わってきた人だけでなく、更に広げていくということを目指し、そのツールとしてハイブリット開催というのは非常に強力なのではないかというような、そういうご説明に感じられた。佐野委員、何かご意見あればよろしくお願ひします。

(佐野委員)

この大会が始まった時に、ウチナーンチュとしてのアイデンティティ、万国津梁会議でもずいぶん議論した「アイデンティティ」の部分、みんなが、なんというか、確信する、或いは、それを拠り所にして絆を再確認してさらに深めていこうという、そういうところがあったのだらうと、提言書をまとめる過程で調べ直して思ったのだが、ご説明のとおり、今回は、もっと（ウチナーネットワークを）知ってもらおうということもあると思う。知ってもらおうということでは、みんなが「そうだね」と言って、一つになって集えるかどうかということだと思うので、これからの宣伝、方法次第だと思うが、やはりみんなが「一緒にこれを行っているのだ」、「盛り上げていくのだ」、「それは沖縄県の外も、地球の反対側もみんなそんなのだ」と思えるような、本当に共有されるものがあるというのが重要だと思う。

言葉遣いや表現はいろいろあるが、過去の大会で、みんなが感じていた「強さ」のようなものを、もう一度共有できるような取組を、実際の大会までに進めていく必要があるのではないかと、ご説明を伺いながら思った。

(小川委員長)

佐野委員どうもありがとうございました。

安里委員、先ほどほどウチナーネットワークコンシェルジュの4名の方々が発表してくださった。世界若者ウチナーンチュ連合会のメンバーも入っている。安里委員にとっては後輩が沖縄にいるからこそ、こういうところを強くお願いしたい、ご自身がボリビアという国外を拠点にしているからこそ、沖縄ではここを強化して貰いたいというような要望を伺いたい。もしくは先ほどの発表の中での質問でも構わない。

(安里委員)

コンシェルジュに関しては、すごく期待している。先ほども意見を述べたが期待していることは県民周知のほうである。コンシェルジュが2番目か3番目に挙げた県民周知を期待している。もちろん、海外のウチナーンチュがいてこそそのウチナーンチュ大会であるが、今まで県民周知がすごく課題となっていたので、その教育機関、NGOセンターも関わっているので、教育機関と連携して若い世代への海外移民だとか海外のウチナーンチュの存在を伝えていって欲しいなと思う。

三つ目に挙げていたその後の持続可能な活動への支援、仕組み作りというのにも期待をしている。海外のウチナーンチュ、今ボリビアに住んでいて海外のウチナーンチュ社会にいるが、そこと連携しながらできることもたくさんあると思うので、そこに住んでいる一人として何かしら一緒に頑張っていきたいなと思っている。

(ウチナーネットワークコンシェルジュ：比嘉千穂)

私が安里委員の後輩で、十年くらい一緒にやらせて頂いて、若者ウチナーンチュ大会を中心に、沖縄、世界のウチナーネットワークを県内の方たちに繋げていく活動していたけれども、今、意見が挙がっていたように、教育機関との連携というのはすごく重要だなと思っているところ。ですが、やはり義務教育の中でどれだけウチナーネットワークに関することを伝えられる時間を作っていくかというところが、一番大変な部分かと思うので、その点を県や教育委員会の皆様と力を合わせていきたいと感じている。

また、海外との連携の場合には、まだまだコンシェルジュも不足している部分であり、交流から次につなげ

ていくという場面でも、企業の皆様、先輩たちにご指導頂ければと思っている。

(小川委員長)

ありがとうございました。

コンシェルジュの方々に1つ質問がある。先ほどの比嘉さんの説明で、一番目の課題として、県人会に所属していないウチナンチュの参加をもっともっと上げていきたい、周知していきたいというようなことだが、何か手段は考えているか。どのように周知していこうとしているのか。

(ウチナーネットワークコンシェルジュ：比嘉千穂)

私もそこまで具体的なアイディアは、まだ見つけられていない部分ではある。けれども、その一つ、ジャストアイデアというか、一人でも参加できる世界のウチナンチュ大会とか、こうしたキャッチフレーズ等を、今まで関わってこられなかったウチナンチュの方たちに響く呼びかけをいかにできるかというところが一つポイントになるのかなと思っている。

(ウチナーネットワークコンシェルジュ：金城さつき)

補足というか、個人でも参加できるのではないかと、今までも個人で参加してきた人達がいるはずだよというふうに、私たちも最初は聞いた。海外からの参加の場合、例えばこれは来県した時の話だが、移動の時に、入場に必要なパスとかIDを持って、無料でバス、公共交通機関に乗れたりとか、大会イベントに入場できたということに関して、それらが県人会を通してではないと支給されないというところで、県人会に所属していないと参加するのを、ちょっと躊躇、ためらってしまう。どうしていいかなというふうに考えてしまうところがある。県人会が近くにあれば参加も所属もしやすい。

近くにないという方、直接ご意見頂いた方が、いらっしゃるところの近くに県人会がなくて、少し離れたところに所属しようかということ等、いろいろ考えたようである。

しかし、ただ単にウチナンチュ大会に参加したいがための県人会参加ではなくて、交流を深めたりネットワークを広げたりというようなことも考えて県人会への参加を考えるのもであろう。

ウチナンチュ大会への参加に焦点をあてた時に、もっと個人で参加することができれば、参加しやすくなると思う。

ただ、県人会では、県会のメンバーも年々減少傾向のところもあるので、個人参加を認めてしまった時に、県人会への参加が少なくなってしまうのではないかと意見が挙がるかと想像もする。

一方、県会の良さや県会に入っているの楽しみについて、大会に参加することで見えてくるところもあるのだろうから、余りそういう条件を設けずに参加できるような仕組み作りがあっても良いのではないかと、ということ聞いたことがある。

(小川委員長)

非常に具体的な例をありがとうございます。

実行委員会には、こうした参加の仕方、海外の場合だが、県人会に参加しない方でも参加できるような仕組みづくりというのは、第7回から可能となるのかお伺いしたい。

(宮城清美 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課ウチナンチュ大会準備室室長)

前回大会は海外県会に所属していなくても参加していただいた。海外県会は、県会を通して申し込み、それ以外の方は、ホームページの参加登録システムから申し込んでいただいた。

ただ、前回大会は申し込みが少し多かったので、県民や一般参加の方については全員の参加が叶わず、抽選となった。

海外県人会をとおして申し込んだ方は、パスやモノレール1日無料券の特典がある。それ以外の方についてはない。これは、海外県人会の活動により多く参加して欲しいこともあり、これまで設けているとの事なので、今大会での扱いについては事務局内で検討したい。即答は出来ないが、これまではそういう状況だった。

県人会に所属していなくとも、より多くの方に参加していただきたいし、比嘉千穂さんの意見にあったように、キャッチフレーズで、一人でもいいというのが伝わるような形があればいいと思う。

事務局では、様々な機会をとらえて周知している。県人会をとおした周知、コンシェルジュが発行している毎月のニュースレターの活用。ブラジルやハワイの旅行社が多くの子系人とやり取りがあると聞いた際にも、ウチナンチュ大会の周知について個々に協力をお願いした。

事務局ではあらゆる機会をとらえて周知を行っているが、なかなか届いていない状況がある。参加したい、いつ開催か等の問い合わせもあり、周知については、様々な機会の活用、色々なところへの協力依頼、実行委員会を通じた働きかけも行っていきたい。

(小川委員長)

今の説明では、前回から県人会を通さなくても参加が可能になったが、まだ周知がされていなく、海外から来られる方に関しては、ほぼほぼ100%入場が可能になっていること。そして、県外の参加者は抽選になってしまったということ。一つ質問だが、県外の方、東京とか大阪の方、そういう方々は、どういう形で申し込むのか。今回の第7回大会ではどのような予定であるか。

(宮城清美 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課ウチナンチュ大会準備室室長)

今回は、前回と同様に電子申請を考えているところ。まず海外県人会や国内県人会の申し込み、それから、県人会に所属していない海外の方などの申し込み、その後、一般県民の申し込みとなり、三段階に分けて申し込みを受け付けることを考えている。

ですので、海外から参加される方は、全員参加できるように考えているところ。

(小川委員長)

つまり沖縄在住の方と沖縄県外の方は、同じ条件で抽選が開始されると考えてよいですか。

(宮城清美 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課ウチナンチュ大会準備室室長)

県外の一般の方、国内の県人会については、できるだけ参加できるように考えている。

(新垣秀彦委員)

今回はこの海外ネットワークに関する万国津梁会議において、ウチナンチュ大会の実行委員会に何らかの提言をするという形。そして今、委員、コンシェルジュの皆さんは非常に多様な意見がある。例えば、9時からのゴールデンタイムを何か使えないか、工夫ができないかなど。我々の万国津梁会議だけでなく事務局としては他にもおそらく、もう一つ練り直せるのかというアイデアをもらうためにどこかに意見を聞きに行く、お伺いに行くっていう考えがあるのか伺いたい。

(宮城清美 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課ウチナンチュ大会準備室室長)

万国津梁会議で意見いただいているところだが、前回大会は北米・南米キャラバンを実施し、現地において大会の概要説明などを行っていた。今回コロナの影響で行けないので、オンラインキャラバンを実施し、北米

南米の県系人の方々に概要を説明し、意見を伺うことになる。

(小川委員長)

ということは、日本ではこの場所でのみ、いろいろな意見を伺うということか。

(宮城清美 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課ウチナンチュ大会準備室室長)

現時点ではその通り。

その前に、大会基本コンセプトについては、国内外の県人会や有識者の方々に意見を伺い作成し、実行委員会で承認頂いた。第3回の実行委員会については、万国津梁会議での意見も紹介し議論して頂くことになる。

(小川委員長)

そうすると、次回の実行委員会の集まりまでに、この北米・南米のオンラインキャラバンというのも終了して、それも含めて、実行委員会の委員に紹介しつつ、いろいろご意見伺うことを予定しているのであるか。

(宮城清美 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課ウチナンチュ大会準備室室長)

もしオンラインで意見が出ればそういった形になると思う。

(新垣秀彦委員)

先ほど教育現場、学校現場からの広がりについて、子供が家庭に、家庭が地域にというところで浸透しやすいかなと思っているので、特に全市町村というわけではないが、移民を輩出している市町村、2、3の市町村と意見交換をしてもいいのかなと思う。そこは是非時間の許す限りご検討して頂きたい。

(新垣旬子委員)

質問したい。実行委員会を数回行ってきて練り直してきた案を、今、私たち万国津梁会議に提案してから、さらに今回の会議を持ったと理解している。しかしながら、すでに規模とか流れはできている中で、新しい意見を取り入れるのが、どのくらいのものなのかということ。私たちからしても、たくさんの意見を出してコンセンサスが得られるのか、良くしていけるのかということが1つ。

次に、30年経った今回第7回大会をこのコロナの中行う時に、その次のステップへの基礎作りとして、改めて第二世代のウチナンチュ大会という感じで、初回に参加していた方々、私は「Uchina1000」(※WUB主催オンライン交流イベント)に参加したけれども、皆さん90代、80代っていう人もいっぱいいて、10代の人もあるという、そこも考慮して今回の会議の中に入れていく意見、そして今後どうしたい、そして県全体がウチナンチュみんなでの将来がどういうふうに進んで行くのかということが、ひとつ芯があって、プログラムを育てていくことが考えられると思う。

私たちは自らの熱い思いを多く語っている。すでに業者も決まってイベントも決まって、全て決まっている中での意見収集は、どの程度反映されて将来どういうふうに進んでいくのか。これまで会議等で何回も話してきたと思うが、沖縄が長年培ってきた準備できているものと、世界のウチナンチュで30年培ってきたものどう融和させるか、どういうふうに進んでいくのかという手法も、今後の問題だと思う。

例えば、新垣秀彦委員が発言したように、教育の方はどうしたいのかというのを大会だけで行わないで、日頃からできることを積み重ねる。そういう時に集められる私たちが、それぞれのパーツをどうコーディネートして大会を作るのかということだと思う。そこを是非考えて頂ければと思う。

(小川委員長)

新垣旬子委員、核心を突く質問ありがとうございました。いかがですか。

(宮城清美 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課ウチナーンチュ大会準備室室長)

ウチナーンチュ大会は、実行委員会方式になっていて、新垣旬子委員がおっしゃるように基本コンセプト、内容については承認いただき、現在、業者とやり取りしているところである。全く新しい大きなイベントというのは、予算的に厳しく実現できるかは即答できない。

けれども、ハイブリットということですので、先ほど言った双方向のイベントや、委員長に提供いただいた学生アンケートの中で、音楽イベントでよく知っているミュージシャンの出演により参加が増えるという意見もあったと思う。国内、国外でも認知されている方に出演して頂くという内容については、今、検討している段階なので変えていくことは可能と考えている。

あと、教育ということがあったが、レッツスタディワールドウチナーンチュなどもやる予定なので、その中で、ウチナーンチュ大会について、教育現場でも浸透させていければと考えている。

そして、これまでの海外の30年と、またウチナーンチュ大会の今後ということだが、大会は重要ということには変わらないと思う。これまで第1回から第6回までやってきて、開催ごとに参加人数も増えてきている。これは、ウチナーネットワークの発展に繋がっていると思うので、第7回大会が終わってその次にどう繋げていくか、今後、事務局として考えて行かなければいけないと考えている。

(沖縄県文化観光スポーツ部文化スポーツ統括監 川上睦子)

前回担当したものとして、前回も打ち上げ花火だとおっしゃっていましたが、大会で盛り上がりこれで終わりじゃないよね、ということで、この次の5年間何をしたらいいかということに関し、県人会や民間大使の方等を含め、例えば交流に関心を持たれている方たち皆さんと話し合いを持つ場もあった。

そこから生まれたのがウチナーンチュの日の様々な取組。ですから5年間、何も行ってこなかった訳ではなく、その間の取り組みもウチナーンチュ大会で話し合ったことが基になっている。今回の大会はオンラインがメインではないが、オンラインも表立って使うことによって、転換期ではあると思う。新垣旬子委員が述べたように、今まで参加できなかった方たちが、少なくとも見られるようにはなってきた、大会参加のためには現地で集まるしかないわけではなく、今回からは沖縄に来られなくとも大会の様子が感じられるようになった、あるいは場合によっては、大会の一部として双方向で参加できるようになるという新しい段階として、今回と今後のものを含め、次の大会からは転換期にはなると思う。反省点もおそらく出てくるとは思うが、次のさらに続く次の大会に向けても、今回のハイブリット型式をさらに発展させるような、何か掴めるそういう大会にしていきたいと思う。

それをまた皆さんと話し合う機会が持てると思うので、じっくり話し合い、手法がどんどん変わっていく大会を今回も作る、そして、レガシーを残す。前回はウチナーンチュの日を作ったこともレガシーの一つだし、今回はハイブリットを通して、なにがしかのやり方、レガシーが残っていくのではないかなと思っている。そうしたことを話し合う機会も是非、持てたらと思っている。

(小川委員長)

ご説明ありがとうございました。

先ほど佐野委員が述べた何かしらのテーマ性のような、第7回ではこれをやったぞというものをレガシーと表現されましたが、そういったものが残れば、それはそれでその後にも記憶に残ると思う。それが前回は世界のウチナーンチュの日であり、ある年はWYUAの結成であり、ある年はWUBの結成であった。そういう意味では、ツールとしてのハイブリット、オンライン開催というもの以外に、ツールではなく、何か確信の持てるようなレガシー的なものがあると良いと思う。その辺りはやはり実行委員会が考えるのだろうと思ったりした。

今回約2時間の皆さんの話を聞き感じたことが多くあるが、一つはやはりハイブリッドで世界と繋がれるということ。つまり、会場は沖縄のセルラースタジアムだけではないということに逆のアピールする。また昼間だけのイベントでなく24時間、つまり、私たちから見て地球の裏側に住んでいる人たち、世界のウチナーンチュの人たちと24時間繋がれるような何か時空を超えたライブイベントに発展できたら素晴らしい。もしそうであれば、会場についても、ここに書かれたような大きな主要会場だけでなく、小さな会場でもそれぞれの場で盛り上がっているイベントを中継して世界に発信していく。ライブなり、もしくは録画なりで発信していくという可能性を秘めていると思う。やはり、打ち上げ花火で終わらせないためにも、新垣旬子委員が何度も述べていたが、常日頃、日常の中で世界のウチナーンチュに関して考える機会を事前から構築し、今までとは違ったシステム作りへの挑戦を行うべきではと思う。

私たちの大学でもレッツスタディワールドウチナーンチュを活用しているが、世界のウチナーンチュの日が近づく急遽依頼があり、急遽講師にお話をしてもらったことがある。もう少し、数か月前から、そして数か月後も日常の中に移民のこと、世界のウチナーンチュのことを考えるような機会を、多く仕込んでいくような機会に、今回の大会がなればと思っている。

では、自由討議はここまでとする

本日の議事概要については事務局から委員の皆さんに最終確認を行うので、引き続き対応願いたい。また、本日の議論については、私の方で提言書案としてまとめるという宿題がある。まとめた上で次回の会議において、議論し提言案の内容を決定していきたいと思う。

次回の会議日程は2月10日（木）。引き続きご協力願いたい。

本日はお忙しいなかご出席いただき誠にありがとうございました。

では、これで会議を閉会したいと思います。お疲れ様でした。

※なお、新垣誠委員は、会議当日、オンラインにて会議出席したものの、所属先の新型コロナウイルス感染拡大に関する緊急会議が開かれたことにより、意見等が聴取できないまま途中退席となった。会議後、委員長の指示により、新垣誠委員の会議後の意見として以下の通り追加した。

【新垣誠委員の意見】

「ハイブリッド開催」について

今回、初のハイブリッド開催ということで、オンライン配信のロジスティクスや方法に関しては、新垣旬子委員が指摘したような通信環境の問題、担当する業者のキャパシティ、割り当てられる予算などに拘束され、ある程度、できる範囲が決まっている。これまで沖縄県では平和祈念資料館が主管する「平和の思い」などの事業で、海外数カ国を結んでのオンライン事業を実施しており、各事業のキャパシティと費用との関係も把握しているだろうし、委託する業者でも3年目に入るコロナ禍である程度、ノウハウの蓄積もあると思う。またハイブリッド開催に関する方法論に関しては、小川委員長からも多くの提案があったので、私からの提案は割愛する。

「大会のテーマ ～ウチナーのシンカ、今こそ結ぶ世界の輪～」の実現について

イベントの内容に関しては、様々な意見が出たようだが、私からはあまり議論が見られなかった大会の理念に関して補足したい。個人的には、佐野委員からも提案のあった「アイデンティティの確認」が今回のハイブリッド開催にあたって、最も重要かつチャレンジングなテーマになると思う。自らが「ウチナーのシンカ」であり、その「世界の輪」を結ぶ一員であるというアイデンティティは、どうすれば共有できるか。かつて移民コミュニティのウチナーンチュ・アイデンティティは相互扶助を基盤とする「ユイマール」を持って醸成さ

れてきた。ハワイやブラジルなどで、ウチナンチュ「シンカ」意識は、移民という「受難」（故郷・家族との別れ、ホスト社会における差別や困難など）の体験、そしてそれを乗り越えるために必要だった助け合い、特に重要だったのは経済的支援「模合」を通じた相互扶助で形成されてきた。

あれから何世代も経ったが、現在でも海外のホスト社会でほとんどのウチナンチュは「民族的マイノリティ」であり、自らのルーツについて考えざるを得ない状況が続いる。また沖縄県においても特に日本復帰以降は、「本土並み」スローガンのもと急速な「日本文化・社会への同化」が進み、若い世代間では沖縄の言語や文化、「ユイマール」などの価値観や相互扶助の地域生活が失われつつある。

世界全体がコロナ禍にある中で大会開催の意味は、この世界的「受難」を、ウチナンチュ「シンカ」意識を持って、「世界の輪」というグローバルネットワークで、どう乗り切れるか、ということではないかと思う。第一回大会では、帰郷、家族親戚・友人との再会など、「シンカ」意識が大会会場にも溢れていた。時代が進むにつれて、そもそもウチナーネットワークの基盤となっていた「ユイマール」精神や相互扶助の関係性が実感しづらくなり、大会はフェスティビティを中心として「イベント化」、「お祭り化」したのかもしれない。「打ち上げ花火的」という批判が出てきたのも、それが理由かと思う。しかしながら、それはある意味、時代の変化に伴う自然な変化なのかもしれない。なぜなら一世の時代と比較して海外のウチナンチュも沖縄のウチナンチュも物質的に豊かになり、助け合わなければ生きていけないと感じた世代は去り、親睦を中心とした世代の交流に移行してきたからだ。

「ウチナンチュ・アイデンティティ」を求心力にした交流は、肝心の「ウチナンチュ」の心が何たるか、そのアイデンティティの中心には何があるのか、といった本質に共感し、その心を共有すること無しには、いずれ形骸化していくことだろう。海外県人会への若者の参加率の低下や、アイデンティティの希薄化も、その本質を実践・継承の難しさにあると思う。

ビギンの「島んちゅの宝」にある、「教科書に書いてある事だけじゃわからない」、「きっとここにあるはず」の何となく意識しているその大切な宝を大会のテーマを通して言語化し、さらに単なるスローガンで終わらせないために実践し、共有し、共感の輪を広げ結んでいく必要があると思う。

教育や啓発活動を通して「移民の歴史」学習が大会のコンテンツとして提案されているが、それだけで「シンカ」意識や共感を生み出すには十分とは思えない。私自身、沖縄で沖縄の歴史をいくら学んでも、「ウチナンチュ」を意識することはなかった。ウチナンチュ「シンカ」である自分自身を意識したのは留学中、北米沖縄県人会でメンバーとして「ユイマール」を実践・実感した時だった。シンカ意識を実感するために必要なのは、「共感のコミュニティ」の形成であり、その共感を生み出すためには、「移民の歴史」という知識に加え、実体験を必要とする。自分の行動が、その大きな歴史の流れの一部であると感じるときに、人は共感し、共同体の一員であるという意識を持つ。

今日、世界は「コロナ禍」という受難の真っ只中にいる。世界のウチナンチュと沖縄のウチナンチュも例外ではない。沖縄そして海外で多くのシンカが直面しているはずの苦境に全く触れる事なく、単なる”Festival”（祭り）として本大会を開催することに違和感を持つ。

前置きが長くなったが、「ユイマール」を実感・共感する仕掛けとして、クラウドファンディングの仕組みを利用したチャリティー募金、「世界ユイマール募金」を事業の一環として盛り込んではどうだろうか。佐野委員が指摘した「繋ぐもの」、「一緒にやる」ものの一例として。

ハワイ沖縄連合会は、ここ数年、9月に開催される“Okinawan Festival ~Sharing Uchinanchu Aloha”をオンラインで開催してきた。その一環として、コロナ禍で打撃を受けたウチナンチュ経営のレストランを募金で支援している。これはハワイのウチナンチュ・コミュニティが、その相互扶助の歴史に自らの存在意義を見出し、現在においてもその精神を継承しようとする試みでもある。またオフィシャル・オンラインストアも開設しており、連合会のグッズを販売して活動資金に充てている。

WUBもしくはWYUA、あるいはコンシェルジュでもいいが、大会のグッズや若い世代が身に纏って自らのアイデ

ンティティを誇示できるようなファッションやグッズの販売を担当し、その売り上げを世界的にウチナーンチュのコロナ救済にあてるような取り組みができないだろうか。県内のアーティストやクリエイター、伝統工芸を司る職人たちの作品、コロナで滞った観光産業で行き場を失った特産品（ワールド・ウチナーンチュ・バザールのオンライン開催）などを、アイデンティティの継承に活用することで、県内の産業に新たな活路を見出せないかとも考える。県内と海外のウチナーンチュによる共同デザインのロゴやプリントなども発展性のあるプロジェクトとして案件化できるのではないだろうか。

沖縄と海外コミュニティとの助け合いの歴史は、戦前の仕送りから戦後の救済運動、県人会館建設支援から首里城復興支援に至るまで、脈々と続いている。沖縄県内（市町村レベルがいいかもしれない）へのコロナ支援のための募金、また海外コミュニティの困窮家庭やビジネスに対する支援を、プロジェクト化し、お互いに募金を通して実践する。どのような団体や個人に支援が必要かは、それこそネットワークを通して議論し協働しながら決定する。沖縄対海外である必要もなく、大会開催中、参加者がどこのコミュニティへ募金してもいい。集まった募金は各県人会もしくはWYUA支部が管理・配分を行う。もちろん募金は強制ではないが、一部の大会のコンテンツを有料化し、その収益を全額募金へ回す手もあるだろう。

集金の配分を考える作業は、ネットワーク内における「富の再配分」でもあり、現代における相互扶助がどうあるべきかを考える良い機会だと思う。ネットワーク内にも存在するグローバルサウスとの格差や差別的な社会構造を学び、ネットワーク内の福祉を作り出すという意味でも、ぜひコンシェルジュの若いメンバーに担当してもらいたい。

「世界の輪」を「結ぶ」実践の機会を設けることで、その支援を通して「世界のウチナーンチュ」の一員「シンカ」であることを実感してもらおう。もう一度、世界的ユイマールの精神を蘇らせる。そんな試みができないだろうか。戦後の救済運動で、ハワイや南米の県人会がチャリティーで募金を実施し、そのお金で救援物資を調達した歴史がある。これを「世界のウチナーネットワーク」全体で、大会を通して沖縄が主導して（県行政で旗振りする必要はないが）実施してみてもどうか。連帯感や共同体意識を生むのは、受け身でのYouTubeでの沖縄コンテンツ鑑賞やオンライン会議ではなく（それも有意義だが）、コミットメントを伴ったプロジェクトやインタラクティブな協働だ。

募金の仕組み作り、海外の各コミュニティにおける募金の使い道のニーズ把握などは、そのノウハウを熟知している団体などに外注するのもいいが、コンシェルジュができれば素晴らしいと思う。「世界のウチナーンチュ・ユイマール基金」設立のファーストステップにもなるのではないかと。国内だと「ふるさと納税」で地元意識が高まる例もあるが、海外では宗教の影響もあり、チャリティー募金が日本よりも習慣化していることから、一定の効果が見込めると思う。海外から沖縄への募金が集まり支援の有難さを感じることができれば、沖縄県内でも自分達が「世界の輪」の中のウチナーンチュ「シンカ」であることを意識してもらえないだろうか。本大会を通して移民コミュニティにあった「ユイマール」精神、相互扶助の実践を今に蘇らせることはできないだろうか。その追体験はできないだろうか。その想いからの一提案である。

この試みを実践に移す場合に注意しなければならないことがあると思う。現在、沖縄県が取り組んでいるSDGsは国連サミットがベースという基本的には、国家間の取り決めであり、「地球市民」意識の醸成であるとか「開発教育」の観点からは重要なのだが、大会のテーマとしてウチナーンチュ「シンカ」意識や「ウチナーンチュ・アイデンティティの継承」という観点からは、うまくバランスを取らないといけない。SDGsの理念はどちらかといえば基本的人権のような人類普遍のコスモポリタンな方向性なのだが、その反面「シンカ」意識は、越境的でありながらも固有の歴史的経験に根ざした極めて親密な感情に根ざした特異なものであるからだ。「ユイマール」精神や相互扶助は、もちろん人類普遍の価値観なのだが、これをウチナーンチュ固有の「移民の歴史」の上に位置づけることで、はじめて「シンカ」意識が形成される。「世界のウチナーンチュ」という概念は、常に矛盾する（ように見える）二つのベクトルに引かれながら緊張関係を保っている。「世界へ」開かれるグローバルな意識と、「ウチナーンチュ」という極めてローカルな意識だ。本大会においても、この二つのベク

トルを意識しつつ、そのバランスを取りながら事業を展開することがカギだと考える。

そもそも沖縄県が、海外ウチナーンチュとのネットワーク構築やウチナーンチュ・アイデンティティの継承をなぜ重要視するのだろうか。資源にも土地にも乏しい東シナ海の小さな島が、そのグローバルな「人的資源」に注目するとき、それはある一部の民族に見られる資本増強を目的としたビジネスネットワークなのだろうか。琉球の歴史や移民の体験を振り返っても、それは万国津梁と相互扶助の精神で「結われた」シンカたちのネットワークではないのだろうか。その真髄は、パンデミックのようなグローバル危機を、国家の枠を超えて共に乗り越えていくソフトパワーにあると思う。かつて移民一世は、その知恵と勇気、開拓精神と忍耐力というソフトパワーによって、様々な危機を乗り越え豊かな二世の時代を築き上げてきた。

世界幸福度ランキングで日本が低い位置に留まっているのは、「寛容性のなさ」と「人的関係資本の少なさ」が要因だと言われる。ウチナーネットワークは、多様性に支えられた寛容性によって成り立つ協働を基調とし、その多様性は世界に広がる人的関係資本にある。ネットワークを活用したビジネス交流や経済発展も重要だが、その向こうにある「幸福」をも見据え、未だ叶わぬ「あま世」の実現を、世界のウチナーンチュが共に夢見るきっかけになるような大会を目指すことはできないだろうか。

(了)